

令和 3 年 6 月 22 日現在

機関番号：33115

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K12482

研究課題名（和文）日本語版 ISMI-10 尺度の信頼性・妥当性：地域で支えるためのアセスメントツール

研究課題名（英文）Validation of the 10-item Internalized Stigma of Mental Illness Scale:
Validation of the Japanese Version

研究代表者

田邊 要補（Tanabe, Yosuke）

長岡崇徳大学・看護学部・教授

研究者番号：50515319

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000 円

研究成果の概要（和文）：この研究は、精神障がい者の内面化したスティグマ尺度の短縮版・日本語版の信頼性と妥当性を検討することを目的とし、精神障がいをもち、定期的に精神科外来に通っており、社会福祉施設を利用している242名に対して、自記式質問紙を用いて調査を行い、230名を分析対象とした。再テストは、155名の参加者に行い147名を分析対象とした。

全体の内的整合性の係数は.81であり、再テスト信頼性係数は $r = .78$ であった。基準関連妥当性に関して、日本語版 ISMI-10 尺度は抑うつと正の相関関係があり、自尊心、エンパワメントとは負の相関関係があった。日本語版 ISMI-10 尺度の信頼性・妥当性が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語版 ISMI-29 尺度を作成したことで、日本における精神障がい者の内面化したスティグマが測定できるだけでなく、精神障がい者の回復の一助にもなる。また、ISMI-29 尺度は世界中で広く使われているため、諸外国においてもスティグマ研究との比較も可能になる。

特に、今回作成した日本語版 ISMI-10 尺度は調査項目が1/3に減り、回答者の負担を大幅に軽減することができる点である。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the reliability and validity of the Japanese version of the 10-item Internalized Stigma of Mental Illness (ISMI-10) scale, which was designed to assess internalized stigma experienced by people with mental illness. A survey was conducted using a self-written questionnaire for 242 people with mental disabilities who regularly attended psychiatric outpatient clinics and used social welfare facilities, and 230 people were analyzed. The retest was performed on 155 participants.

The alpha coefficient for the overall internal consistency was 0.81, and the test-retest reliability was 0.78. In terms of criterion-related validity, the Japanese version of the ISMI-10 scale presented a positive correlation between internalized stigma and depression and a negative correlation with self-esteem and empowerment. As for construct validity, we identified the two factors.

The reliability and validity of the Japanese version of the ISMI-10 scale was confirmed.

研究分野：精神看護学分野

キーワード：内面化したスティグマ ISMI-10 精神障がい者 精神測定 信頼性・妥当性

1. 研究開始当初の背景

(1) 精神障がい者が地域で生活するためにはリカバリーは大事な概念である。そして、精神障がい者のリカバリーを進めるうえで、スティグマの存在は欠かせないとの報告 (Georg, & Schomerus, 2012) もある。精神障がい者の内面化したスティグマ (または、自己スティグマと呼ばれる) はリカバリーを妨げ、抑うつの増加、自尊心の減少、リカバリーの減少傾向、エンパワメントの縮小などと関連していると言われている (Ritsher, Otilingam, & Grajales, 2003)。精神に障がいのある人の内面化したスティグマを測定するために、Jennifer E. Boyd (以下 Boyd とする) らは、2003 年に「Internalized Stigma of Mental Illness (ISMI) scale (精神障がい者の内面化したスティグマ (ISMI) 尺度): ISMI-29 尺度」を開発した (Ritsher, Otilingam, & Grajales, 2003)。ISMI-29 尺度は次の 5 つの下位尺度を含む 29 項目からなる自記式調査票である: 疎外感 (6 項目)、固定観念の是認 (7 項目)、差別体験 (5 項目)、社会的引きこもり (6 項目)、スティグマ抵抗 (5 項目)。内面化したスティグマの測定で、最も一般的に用いられる測定の 1 つは、ISMI-29 尺度であり、アメリカ合衆国退役軍人省のメンタルヘルスアシスタントのソフトウェアに含まれている。また、統合失調症、うつ病、ハンセン病、およびエイズの人などの内面化したスティグマ尺度として諸外国で数多く翻訳 (ドイツ語、フランス語、クロアチア語、トルコ語、韓国語、中国語、ロシア語、アラビア語、など) され、世界中で広く使われている (Boyd et al., 2014)。

(2) 日本語版 ISMI-29 尺度については、代表研究者が Boyd らから独占的に作成の許可をもらい、オリジナル (英語版) の著者である Boyd らとトランスレーションとバックトランスレーションを繰り返し、最終的に翻訳した結果の承認を得た。代表研究者が日本語版 ISMI-29 尺度の信頼性・妥当性を計量的に検討し、その論文が 2016 年に BMC Psychiatry に掲載 (Tanabe, Hayashi, & Ideno, 2016) され、内面化したスティグマを測定する有効なアセスメントツールとして使用できることが認められた。

(3) その後、ISMI-29 尺度の短縮版の要請を受けていた Boyd らは、2014 年に「精神障がい者の内面化したスティグマ尺度 (ISMI-29 尺度) (Ritsher, Otilingam, & Grajales, 2003)」の短縮版である ISMI-10 尺度 (Boyd, Otilingam, & DeForge, 2014) を発表した。ISMI-10 尺度は 5 つの下位尺度から 2 項目ずつ含んだ 10 項目で構成されている。ISMI-10 尺度についても、代表研究者が Boyd らから独占的に日本語版の検討の許可をもらった。短縮版の最大のメリットとしては、回答者の負担を大幅に軽減することができる点である。ISMI-29 尺度は 29 項目から構成されているので、負担は単純計算で 1/3 になる。負担が軽減されれば、今まで使用を躊躇していた人でも使う可能性が多くなると考える。

(4) 今後、ISMI-10 尺度を広め、日本において多く使われれば、スティグマを客観的に捉えるアセスメントツールとして活用することができ、精神障がい者を地域で支える一助になる。また、世界中で広く使われているので、海外のスティグマ研究との比較もできる。そのためにも、回答者の負担を大幅に軽減でき、さまざまな職種が容易に使用でき、精神障がい者の地域支援につながる、日本語版 ISMI-10 尺度の信頼性・妥当性の検討が望まれる。

2. 研究の目的

(1) 2014 年に Jennifer E. Boyd らが、「精神障がい者の内面化したスティグマ尺度 (ISMI-29 尺度) (Ritsher, Otilingam, & Grajales, 2003)」の短縮版である ISMI-10 尺度 (Boyd, Otilingam, & DeForge, 2014) を発表した。ISMI-10 尺度を基に調査票を作成し、200 名位の精神に障がいのある人を対象に調査を行い、その尺度の信頼性・妥当性を検討することである。

3. 研究の方法

(1) 研究対象者

選択基準

この調査の対象者は、精神に障がいがあり、定期的に精神科外来を受診していて、社会福祉施設を利用している 20 歳以上の人である。そして、日本語を読解できる人である。

除外基準

精神科診断名欄に知的障害または器質性脳疾患と回答した人、そして、調査票の質問を完了することができなかった人である。

(2) データ収集期間及び調査施設

データ収集期間

2017 年 8 月～2018 年 2 月の間。

調査施設及び参加人数

群馬県内 9 か所、新潟県内 12 か所および埼玉県内 9 か所の社会福祉施設で行った。この調査の説明を聞いてくれた人は 274 名で、そのうち、242 名が参加に同意した。() 内は参加人数である。

< 群馬県 >

伊勢崎地域活動支援センター (12) 華蔵寺クリニック (10) ワークプラザ虹 (17)
エコー (10) みやま工房 (12) インフィニット (15) リベルタ安中 (1)
のぞみ (8) リベルタ高崎 (2)

< 新潟県 >

わかあゆ社 (6) またたびの家 (11) エンゼル妻有 (4) こそみ荘 (4)
リンク in ひだまり (7) のっぺ (8) サンスマイル (13) うらら長岡 (8)
さつき工房 (17) 魚野の家 (11) 魚野の家うらさ (2) すみれ工房 (3)

< 埼玉県 >

アバンティ (13) はばたき (2) あゆみ舎 (13) すてあーず (8)
ゆめきた工房 (6) 喫茶ルポーズ (8) サポートステーションやどかり (2)
エンジュ (3) やどかり情報館 (6)

(3) 調査内容

基本属性

年齢、性別、住所、学歴、婚姻状態、同居の有無、精神科診断名、発病年齢、施設利用期間。但し、精神科診断名については対象者の自己申告である。

ISMI-10 尺度

精神障がい者の内面化したスティグマを測定するための ISMI-10 尺度は 10 項目からなり、ISMI-29 尺度の 5 つの下位尺度である疎外感 (6 項目) 固定観念の容認 (7 項目) 差別体験 (5 項目) 社会的引きこもり (6 項目) およびスティグマ抵抗 (5 項目) から 2 項目ずつ抽出し、構成されている。各項目は 4 ポイントのリッカート尺度で評定され、「1: 全くそう思わない」から「4: 非常にそう思う」までの範囲に及んでいる。スティグマ抵抗項目は、スティグマに対して「抵抗するか、または影響を受けない経験」を測定する。それは逆コード化されているので、妥当性チェックとしても機能しており (Ritsher, Otilingam, & Grajales, 2003) 5 から評価点を引いたものが得点となる。ISMI 合計点数の高い得点は、その個人において内面化しているスティグマ形成が、より高いことを示す。

外的妥当性

先行研究 (Ritsher, Otilingam, & Grajales, 2003) に基づき基準関連妥当性をテストするために、Boyd らが使用した 5 つ尺度の中から、内面化したスティグマに関連のある、次の 3 つの尺度を用いた。

・ベックの抑うつ評価尺度 (BDI)

日本でも広く用いられているベックの抑うつ評価尺度 (Beck Depression Inventory; BDI) は、21 項目からなる抑うつ症状を測定する主観的自己評価尺度である (Beck et al., 1961)。各項目を 0 (なし) から 3 (重度) 点で評価し、合計点は 0 から 63 点になる。合計点数の大きさと抑うつ症状の重症度を評価することができる (林, 1988; 林・瀧本, 1991; 菅原, 2001)。

・ローゼンバーグの自尊心尺度 (RSES)

自尊心は、ローゼンバーグの自尊心尺度 (Rosenberg Self Esteem Scale; RSES) を用いて測定した (Mimura, & Griffiths, 2007)。RSES は 4 ポイントのリッカート尺度で評定され、「1: 強くそう思わない」から「4: 強くそう思う」までの範囲に及んでいる。合計点は 4 から 40 点になり、より高い点数は、より高いレベルの自尊心につながる。日本語版の信頼性と妥当性の検証は、内田らによってなされた (内田・上埜, 2010)。

・エンパワメント尺度 (ES)

エンパワメントとは、自分自身の生活や自分がおかれた生活環境・社会に対する力をもつということである (Rogers et al., 1997)。内面化したスティグマとは対極にある「意欲的な態度」である。Rogers et al. のエンパワメント尺度 (Empowerment Scale; ES) は、精神障がい者のために作られた、エンパワメントの心理的側面を評価するための自記式尺度である (Rogers et al., 1997)。28 項目の質問に対し、「1: まったくそのとおりだ」から「4: まったく違う」までの 4 ポイントのリッカート尺度で評定される。合計点は 28 から 112 点になり、より高い点数は、より高いレベルのエンパワメントにつながる。エンパワメント尺度 (ES) の項目は、「私は自分自身に対して肯定的な気持ちでいる。」や「私はいつも無力だと感じる」そして「人間は集まって協力し合えば、より大きな力を持つ」などが含まれる。日本語版の信頼性と妥当性の検証は、畑らによってなされた (畑・前田・辻井他, 2003)。

(4) 調査手順

事前に、各社会福祉施設の施設長に会い、研究目的、2 回分の研究方法、個人情報保護などについて文書と口頭で説明し、書面にて同意を得た。

調査は、各社会福祉施設に出向き 2 回行った。1 回目の調査実施にあたり、事前に施設長より、対象者に対して、調査目的、調査日時、調査者、参加の自由について口頭で伝えてもらい、研究

への参加に関心を示した対象者が一室に集まった。その部屋に集まった対象者に対して、研究者が研究説明書、調査票および封筒を配布し、研究目的、研究方法、参加の自由などについて文書と口頭で説明した。研究参加の意思のある対象者からは書面にて同意を得た。同意書を回収した後、研究者は直ちに部屋から退出した。記載された調査票は封筒に入れ、封をしっかりとしたうえで、各施設の事務室前に設置された回収箱に投函してもらった。回収箱の設置は調査した翌日の 12 時までとした。回収箱に投函された調査票は、施設長から研究者宛に郵送してもらった。2 回目の調査は 1 回目の調査から 5 週間後に、研究の目的や方法などが書かれた文書を配付して説明し、同意書で同意の得られた人に、1 回目と同様の方法で行った。

(5) 分析

以下の統計処理には SPSS Statistics 25.0(IBM SPSS Statistics for Windows, Version 25.0) を用い、有意水準は両側 0.05 とした。

基本属性

性別、住所、婚姻状態、学歴、精神科診断名、施設利用期間による合計 ISMI-10 得点の違いは、t 検定と一元配置分散分析を用いて行った。

信頼性の検証

日本語版 ISMI-10 尺度の信頼性は、クロンバックの α 係数の算出による内的整合性の検討と、合計得点間の相関を Pearson の相関係数の算出による再テスト信頼性の検討によって信頼性の検証を行った。

妥当性の検証

尺度の妥当性は基準関連妥当性と構成概念妥当性によって行った。基準関連妥当性は、日本語版 ISMI-10 尺度とベックの抑うつ評価尺度 (BDI)、ローゼンバーグの自尊心尺度 (RSES)、そしてエンパワメント尺度 (ES) との相関によって検証した。構成概念妥当性については、最尤法によるプロマックス回転で因子分析を行った。固有値 1.0 以上を軸として因子を抽出した。

(6) 倫理的配慮

本研究の実施にあたり、各施設の施設長および対象者に対して、研究目的、研究方法、参加の自由、不参加により不利益が生じないこと、同意をした後でも辞退できること、調査票は無記名式のため、提出後は取り消せないこと、個人情報の保護などについて文書と口頭で説明し、書面にて同意を得た。調査票は封筒に入れ、封をしっかりとしたうえで、各施設の事務室前に設置された回収箱に投函してもらった。なお、本研究は高崎健康福祉大学倫理審査委員会の承認 (承認番号 2910) を受けて実施した。

4. 研究成果

この調査の説明を聞いてくれた人は 274 名で、そのうち、242 名が参加に同意した。精神科診断名欄に知的障害または器質性脳疾患と回答した人、調査票の質問を完了することができなかった人を除き、230 名 (有効回答率: 95.0%) を分析の対象とした。

再テストは調査から 5 週間後に、同意書で同意の得られた 155 名に対して行い、147 名を分析対象とした。

(1) 対象者の特性

対象者の平均年齢は 48.2 (SD 12.3) 歳、平均発病年齢は 25.5 (SD 9.7) 歳であり、男性 148 名 (64.3%) と女性 82 人 (35.7%) であった。教育については高等学校卒業が 105 人 (45.7%)、婚姻については独身が 175 人 (76.1%)、精神科診断名については統合失調症が 167 人 (72.6%) と最も多かった。

(2) 日本語版 ISMI-10 尺度項目の平均得点

日本語版 ISMI-10 尺度の合計平均得点は 2.38 (SD 0.82) であり、2.5 の中間よりも上の割合は 40.9% であった。

(3) 日本語版 ISMI-10 尺度平均合計得点

男性 23.3 点、女性 24.7 点と、女性の方が高い得点であり、日本語版 ISMI-10 尺度の平均合計得点と性別との間で有意な差があった ($t = -2.08, P = .04$)。しかし、住所、教育、婚姻、同居、精神科診断名、施設の利用期間との間で有意な差はなかった。

(4) 信頼性

内的整合性

日本語版 ISMI-10 尺度の内的整合性の α 係数は .81 (N = 230) であった。

再テスト信頼性

日本語版 ISMI-10 尺度合計得点の相関は $r = .78$ ($P < .01, N = 147$) であった。

(5) 妥当性

基準関連妥当性

日本語版 ISMI-10 尺度は抑うつ ($r = .58, P < .01$) と正の相関関係があり、自尊心 ($r = -.62, P < .01$)、エンパワメント ($r = -.52, P < .01$) とは負の相関関係があった。いずれもかなりの相関を示した。分析人数は 230 名である。

構成概念妥当性

最尤法によるプロマックス回転で因子分析を行った。固有値 1.0 以上を軸として因子を抽出した。2 つの因子が得られた。最初の因子は、反転項目であるスティグマ抵抗以外の全ての項目 (8 項目) を含んでいた。2 番目の因子は、反転項目であるスティグマ抵抗の項目 (2 項目) を含んでいた。そのため、因子名は第 1 因子を「内面化したスティグマ」、第 2 因子を「スティグマ抵抗」とした。因子間相関は .503 であった。適合度の評価 (KMO) は .850 であり、バーレットの球面性検定は $P < .01$ であった。

(6) 結論

以上の結果より、日本語版 ISMI-29 尺度と同程度の信頼性・妥当性が確認されたので、日本語版 ISMI-10 尺度は日本における精神障がい者の内面化したスティグマ尺度として有効なツールとして使用できるであろう。今後は、この尺度が日本の臨床医や研究者などによって使われ、精神障がい者の理解が深まるとともに精神障がい者のリカバリーが推進されることを期待する。

<引用文献>

- Beck, A. T., Ward, C. H., Mendelson, M., et al. (1961). An inventory for measuring depression. *Archives of General Psychiatry*, 4 (6), 561-571.
- Boyd, J. E., Adler, E. P., Otilingam, P. G., et al. (2014). Internalized Stigma of Mental Illness (ISMI) scale: a multinational review. *Comprehensive Psychiatry*, 55, 221-231.
- Boyd, J. E., Otilingam, P. G., DeForge, B. R. (2014). Brief Version of the Internalized Stigma of Mental Illness (ISMI) Scale: Psychometric Properties and Relationship to Depression, Self Esteem, Recovery Orientation, Empowerment, and Perceived Devaluation and Discrimination. *Psychiatric Rehabilitation Journal*, 37 (1), 17-23.
- 畑 哲信, 前田恵子, 辻井和男, 他 (2003). 統合失調症患者に対するエンパワメントスケールの適用. *精神医学*, 45 (7), 733-740.
- 林 潔 (1988). 学生の抑うつ傾向の検討. *カウンセリング研究* 20(2), 162-169.
- 林 潔, 瀧本孝雄 (1991). Beck Depression Inventory (1978 年版) の検討と Depression と Self-efficacy との関連についての一考察. *白梅学園短期大学紀要*, 27, 43-52
- Matthias C. Angermeyer., Georg Schomerus. (2012). A stigma perspective on recovery. *World Psychiatry*, 11(3), 163-164.
- Mimura C, Griffiths P. (2007). A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: translation and equivalence assessment. *Journal of Psychosomatic Research*, 62, 589-594.
- Ritsher, J. B., Otilingam, P. G., Grajales, M. (2003). Internalized stigma of mental illness: Psychometric properties of a new measure. *Psychiatry Research*, 121, 31-49.
- 菅原ますみ (2001). 抑うつ, 堀洋道 (監修): 心理測定尺度集 - 心の健康をはかる 適応・臨床 - (初版第 5 刷). 136-146, 東京, サイエンス社
- Tanabe, Y., Hayashi, K., Ideno, Y. (2016 年 4 月 30 日検索). The Internalized Stigma of Mental Illness (ISMI) scale: validation of the Japanese version. *BMC Psychiatry*. <https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC4850681/>
- 内田知宏, 上埜高志 (2010). Rosengerg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討 Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて. *東北大学大学院教育学研究科研究年報*, 58(2), 257-266.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 田邊 要補	4. 巻 1
2. 論文標題 短縮版・日本語版 ISMI（精神障がい者の内面化したスティグマ）-10 尺度の信頼性・妥当性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本精神保健看護学会誌	6. 最初と最後の頁 1～8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20719/japmhn.30.20-034	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田邊要補
2. 発表標題 日本語版 ISMI（精神障がい者の内面化したスティグマ）-10尺度の信頼性・妥当性
3. 学会等名 日本精神保健看護学会第28回学術集会・総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田邊要補
2. 発表標題 日本語版 ISMI（精神障がい者の内面化したスティグマ）尺度開発の経過 - 日本語版 ISMI -29尺度および日本語版 ISMI -10尺度 -
3. 学会等名 第83回日本健康学会総会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

ISMI-29およびISMI-10を知ってもらうためのリーフレットを作成した。

その内容は次の通りである。

- ・ ISMI-29の概要
- ・ ISMI-29尺度の構造と特徴
- ・ 文献
- ・ 日本語版 ISMI-29および日本語版 ISMI-10の調査票
- ・ 著者の連絡先

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------